救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry
11月号
福音版
2021
November
No.2825

二〇二一年　十一月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

もう一度会える日を待ち望みながら

山谷　真



人間はいつから人間になったのか？　これについては諸説あります。

一つには、死者を悼むようになって、人間は人間になった、というものがあります。

先史時代の墓が見つかり、そこには野の花が手向けられていた痕跡があった、という記事などを読むと、単なる知的好奇心ではない、何か魂に触れる感興を覚えます。

東京の郊外にある多磨霊園には、日本の近現代史をつくった偉人や名士や作家たちの墓が点在していますが、その中に囲まれるようにして、救世軍の墓所がひっそりとたたずんでいます。

そこには、信仰の友たちの遺骨、病者や弱者の救済に生涯を献げた士官（伝道者）の遺骨、救世軍の病院や施設で亡くなり、ご家族に引き取られることがなかった方々の遺骨が納められています。

救世軍では毎年秋にその墓所の前で召天者合同記念会をおこなっています。澄み渡った空の下、陽光に輝く銀色のブラスバンドが賛美歌を演奏し、亡くなった方々の名前が読み上げられ、追悼の祈りが献げられ、聖書のメッセージが語られ、花が手向けられます。

それから、墓所の扉が開かれて参列者が順番に中に入り、自分と心のつながりがあった故人の骨壺を確認します。

その時によく交わされるのが、「この隣りに自分ももうすぐ入るから、場所を空けておいてね」というような会話です。

人生には死という現実が厳然として存在しています。わたしたちはその現実を認識しながら、人と人の心のつながりの中を今日も生きています。

そして、不思議なことに、人と人の心のつながりは死によって断ち切られることがない、ということを、人はみなどこかで信じています。あるいは、少なくとも、信じようとしています。

墓に手向けられる花束は、その目に見えない心のつながりを、見える形であらわすシンボルなのかもしれません。

キリスト教会の葬儀や記念会では白百合がよく用いられます。伝説によれば、イエス・キリストが十字架につけられ、死んで、納められた墓の周囲には、白百合が美しく咲いていたとされています。

そのキリストは、新約聖書によれば、三日目に死者の中から復活しました。そして、人生は死では終わらないこと、墓の向こう側に希望があること、人と人の心のつながりは永遠に続くことを、キリストは復活したその姿を通してわたしたちに示してくれました。

「イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』」

（ヨハネによる福音書11章25～26節）

昨年から今年にかけて、コロナ禍のために思いがけず地上を去らなければならなかった人が多くあったことを、悲しみの内に覚えます。

その悲しみの中でわたしたちは、去って行ったあの人の顔、この人の顔を想います。そして、姿は見えなくなってしまったけれども、目には見えない心のつながりが今日も生きていることを信じて、白百合の花束を手向けようとします。

その花は、わたしたちには再会の希望があることを、無言のうちに語りかけているかのようです。

（救世軍士官〔伝道者〕）

信仰の体験談　証言のページ





救世軍　伝道者　鈴木 實 さん

＜プロフィール＞

1936年生まれ。酒害に苦しんだ日々を経て、キリストに出会い、救われて、救世軍で献身の生活を送る。救世軍月島小隊所属。

上写真：1974年の自助館（男子社会奉仕センター併設）。2016年に閉館し、現在は月島小隊が同地にある。

なぜ、こんな時代に生まれてきたのか、この環境に生まれたのか――。生きる痛みと空しさを覚える時、人は様々な物で心を満たそうとします。鈴木實さんは長年、アルコールの「魔力」に捕らえられ、絶望の淵を経験しました。「どうしようもない」ところから救い出され、キリストと出会い、新しい生き方へと導かれた、鈴木さんのこれまでの歩みをお聞きしました。

子どもの頃の経験――戦争の時代の中で

聖書の詩編というところにこうあります。

「わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。主はお前の罪をことごとく赦し　病をすべて癒し　命を墓から贖い出してくださる。」（詩編103編2～4節）

これはイスラエルの王であったダビデ王が、犯してしまった大きな間違い、大きな罪を神様に赦され、再び用いられるようになったことを心から感謝してつくった詩だと思います。この詩を読むと、私自身、神様に背いた大きな過ちを悔い改めて赦された者として、人間として共感と深い感動を覚えるのです。

幼い頃は戦争の時代でした。終戦の年、九歳二カ月だった私は大阪で、府立の「感化院」（現在の児童自立支援施設）と言われていた施設にいました。物資も乏しく、配給制が始まっていた中で、私は食べる物があったら何でも食べてしまう、「餓鬼」のような存在でした。隣近所の家の物まで食べてご迷惑をかけるので親も持て余して、その施設に入れたのです。しかし私は反発して盗み食いをし、夜には施設を抜け出して町へ行く……、という具合でした。たまたま八月十四日の夜、そういうことをしたので捕まって、施設の中央事務所に連れて行かれました。そして十五日の正午、玉音放送が流れて敗戦を知ったわけです。すると若い職員の連中は、がっかりして、腹が立ったんでしょう。私の所に来て、「お前のような奴がいるから戦争に負けたんだ」と言って、竹刀で殴ってきたのです。今では決して考えられないことですが、そういう時代でした。

しかし、そんな暴力で押さえつけられても、盗み食いの悪癖が治るわけではない。そこではどうしようもなくて、家に帰らされました。しかし家庭も複雑でしたので、戦争が終わって昭和二十一年頃にはだんだん家出を繰り返すようになりました。駅に集まっていた当時の戦災孤児の群れの中に入って、自分も戦災孤児だと言うようになりました。そうやって人をだまして生きていました。

動乱の中で――アルコールに捕らわれた日々

その頃の、記憶に残る事柄があります。岡山では、靴磨きの露天商をしていたおじさんに「うちの子になれよ」と連れて行かれ、その人の子どもと一緒に学校に通わせてもらいました。本当に大切にしてもらったのに、依然として私の盗み食い、困ったら逃げ出すという悪癖は変わらず、そこを飛び出してしまいました。

無賃乗車で汽車に乗っては時々捕まって、施設に入れられるのですが、鳥取の米子で子どもの施設にいた時期がありました。そこではクリスマス前の行事で『ジャン・バルジャン』という劇に出ました。この記憶は後になって大きな意味をもつものになりました。

しかしそこも飛び出して、九州で養蜂業者さんに出会いました。暖かくなると花を追って北海道まで行く。一緒に行って、その人の紹介で別の人の養子になりました。今振り返ると、人との出会いがあり、動乱の中でも生かされていたとわかりますが、当時の私の中には、「なんでこの世の中に、こんな時に生まれてきたんだ。こんな風に生まれたくはなかった」という思い、反抗する思いがありました。養親に中学校まで出していただいたけれど、酒を飲むことを覚え、だんだん自分勝手な生き方をするようになりました。子どもの頃の「食べるためなら何でもする」が「酒を飲むためなら何でもする」へと、依存の対象が変わっていっただけでした。

アルコールを飲み始めるとその魔力にとらわれ、酒を飲むことが生きる目的になっていきました。そして二十代、三十代は転落の日々でした。法律を犯し刑務所も経験しました。北海道

中を流れ歩いて、さらに大阪へ。そこでもどうしようもなくて、最後、東京に出て来ました。東京でもやっぱり酒を飲んでどうにもならなかった。大阪の西成、東京は山谷での生活も、酒のためにそこにさえ住めなくなりました。墓地に住みついて、墓前に供えられた酒を飲み、供え物を食べた経験さえありました。そんな人生に絶望して、自殺を試みたことも何度もあります。しかし実際には最後の決断に踏み出せず、生きながらえていました。そのうちに酒害がひどくなり、幻聴幻覚が現れ始め、精神病院へ。退院後も飯場やドヤ街へ戻って働いては再飲酒し、同じようなパターンで入退院を繰り返していました。

救世軍との出合い
―人間性の回復、新しい生き方へ

ちょうど四十歳の時でした。四回目の精神病院入院中に、それまでとは違う深い絶望感に襲われた私は、「神様、仏様、もし本当にいるのなら、私をこんな苦しい中から救ってください。もし助けてくれたら、これから先はあなたの言うことを何でも聞きますから」と祈りました。そして突然、心の中に浮かんできたのが、幼い頃、三十年も前に施設で演じた『ジャン・バルジャン』の劇でした。ジャン・バルジャンが盗みの罪を神父に赦され回心し、立ち直って世の中で良い働きをしていった姿―この生き方を私もしたいと思ったのです。酒を飲まずに、新しく生き直すことができる施設へ行きたいとの願いが起こりました。

退院するにあたって、山谷の城北福祉センターの医療相談員の方が、東京中央区の救世軍の「自助館」という施設を紹介してくれました。キリスト教の施設というので、ジャン・バルジャンの生き方に魅かれていた私には願ってもない場所に思えました。すぐに面接があり、入所できることになりました。そこは「男子社会奉仕センター」という、アルコール依存症の人たちが回復するための施設が併設されていました。当時は責任者の士官（伝道者）ご一家と、館生十五、六人が一緒に食事をしていました。食前には感謝の祈りをし、毎朝聖書の短い話がありました。今まで経験してきたのとはまったく違う処遇の中で、私の人間としての感覚が回復されていきました。施設や隣接する月島小隊で働く、キリストの精神をもった士官方と触れ合いながら生活をする中で、私はだんだんと正気に戻っていきました。その方たちが過去の罪を問わず、そのままの姿で受け入れ、共に生活してくださったことは、新しい生き方を私に示してくれました。

献身への導き
―幸いな人生への道を伝える者として

この頃、日本にできたばかりのアルコール依存症者の自助グループ（「ＡＡ」：アルコホーリクス・アノニマス）を救世軍が取り入れ、毎週月曜日に施設の中で集会が開かれていました。「酒を飲まないだけでなく良い人生を過ごせますよ。あなたも一緒にやりませんか」と誘われ、参加するようになりました。その頃読んでいた芥川龍之介の短編『蜘蛛の糸』で、主人公はお釈迦様の下ろしてくださった蜘蛛の糸を独り占めしようとしたとたんに、再び地獄の底に落ちて行きました。私は、自分に与えられた救いの糸は、自分だけでなく、同じような環境にいる仲間たちも一緒になって上ることが大切だという気づきを与えられ、それ以後、ＡＡの仲間と一緒に行動し、それまでの生き方を点検する中で、心の目が大きく開かれていきました。

社会に役立つ働きをしたいと、自助館にいる間に、夜間の講習でボイラー技士の勉強をし資格を取ることができました。その後、東京の清瀬にある救世軍の特別養護老人ホームで採用していただき、三年間働きました。この三年間は、私の心の中の霊的な部分が変えられた時でした。毎朝の朝礼で語られる聖書の言葉、メッセージが心の中にしみこんでくるようになり、イエス・キリストが御自分の命と引き換えに、私の罪を赦し、救いを成し遂げてくださったことを納得し信じることができました。聖書の言葉を、知識としてではなく、自分の生きる糧として求める者になりました。

この職場は安定した収入も生きがいもある仕事でしたが、私には次第に、自分だけが幸せになってよいのだろうか、同じ境遇の人々が生き直すことに結びつくよう、この場所は他の人にお譲りして、自分の救いの経験をお伝えする働きへと進むべきではないかという思いが与えられていきました。それは献身し救世軍士官となるという道でした。

相談と祈りを重ね、救世軍清瀬小隊で兵士入隊式[*1]をし、約一年後、献身の志願書を提出しました。一九八〇年四月、救世軍士官学校[*2]に聴講生として受け入れられ、卒業後、尾道や熊本、大牟田の小隊で伝道に励みました。アルコール依存症者の仲間のための働きも各地で微力ながらすることができました。良き伴侶が与えられ、常に支えられて、七十歳で引退するまで働くことができました。

神様に造りかえられて―平安な日々

そういう人生を送ってきました。四十歳で自助館に来た時は、中卒の、本当に何もない、無免許、無資格、お金もなければ保証人もない、紙袋一つ持って上野からやって来た者でした。そんな私を、神様は造りかえてくださいました。今八十五歳になり、アルコール無しの生活も四十五年となりました。自助グループの仲間にも支えられています。本当に良い後半生を与えられ、今は、神様が備えてくださっている御国に帰ることを願いつつ、とても平安な日々を過ごしています。

私の「こんな時代に、こんな家庭に生まれるんじゃなかった」といういら立つような思いは、多くの人の支えと犠牲的な愛によって、他者を愛することができる心へと変えられました。何よりも私はイエス様と出会い、私のために十字架にかかってくださったことを知ることができました。これは人生の一番の喜びです。

今もいろいろと難しい時代ですが、こういう人生もあるということを知っていただき、イエス様に出会う方々が起こされるよう、願っています。

＊1兵士入隊式：正式に救世軍の兵士（信徒）となる儀式　＊2士官学校：神学校にあたる

飲酒の問題を抱えておられませんか。
自助グループ「AA」については
こちらをご参照ください。

AA 日本ゼネラルサービス
https://www.aajapan.org/
電　話：03-3590-5377
メール：jso-1@fol.hi-ho.ne.jp
※ AA は独立した自助グループであり、救世軍とは別組織です。

創立者　ウイリアム・ブース　大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　スティーブン・モーリス（救世軍本営　東京都千代田区）

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈米国〉●難民支援のために

アフガニスタン難民に対して救世軍が最善の支援を提供できることを願い、救世軍米国総司令官ケネス・ホッダー中将（写真右から２番目）は、９月に米イスラム救援協会アンワル・カーン会長と会談して貴重な助言を受けました。救世軍は宗教や信条にかかわらず、すべての人の必要に応えることを使命としています。



●「救世村」の開設

米国では、街頭生活者の増加が深刻な問題となっています。カリフォルニア州南部のハーバーシティで、救世軍は地元自治体や大学の支援を受けて、街頭生活者のための「救世村」（サルベーション・ビレッジ）を開設しました。75人分の小さな家が並ぶ敷地内にはケースワーカーとソーシャルワーカーの窓口が設けられ、社会復帰への手助けがなされます。



〈カナダ〉山火事被災地での支援

カナダのブリティッシュコロンビア州では８月中旬に大規模な山火事が発生し、３万世帯以上に避難命令が出されました。救世軍では現地の小隊（教会にあたる）の建物を避難場所として開放し、６つの先住民族の集落を対象に食料品を配布しました。また、消火作業に従事する消防隊員に対して食事と飲料を支援しました。



〈ミャンマー〉クーデター後の支援

２月にクーデターが起きたミャンマーでは政情不安が続いています。銀行、商店、病院が閉鎖を余儀なくされる中、食料品や医薬品の供給が滞っており、また、新型コロナウイルスの感染予防に必須なマスクの入手が難しくなっています。救世軍では北部のカライとタムで約1,700人を対象に豆粉、米、調理油、絆創膏、解熱錠剤、マスク、消毒液等を配布しました。



〈オーストラリア〉従軍牧師の働き

いくつかの国で救世軍は従軍牧師の働きもしています。オーストラリアの救世軍士官（伝道者）のペンニ・ローデン少佐（写真右）は、オーストラリア国防軍の従軍牧師としてブリスベーンやキャンベラなどの駐屯地でおもに軍人の配偶者や家族へのケアに携わり、このたび国防軍から15年の永年勤続章を授与されました。



救世軍とは？ What is The Salvation Army?

心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界132の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で、家のない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や子どもたちに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

救世軍は長年、アルコール依存症からの回復支援に携わってきました。アルコールによってその人生に深い痛みを負った人々が、アルコールを必要としない生き方と出合い、回復し、社会に復帰できるように願いつつ、その働きを進めています。現在、東京都杉並区と墨田区にバザー場がありますが、この働きは「人と物の再生」をテーマに、アルコール依存症者の回復と自立を支援するために始まりました。また、救護施設「自省館」（東京都清瀬市）では、飲まない生き方を身につけ、回復の道を歩むための支援がなされています。

※現在の新型コロナウイルス感染症の影響下においても、救世軍の小隊、社会福祉施設、病院は、感染予防策に最大限努力し、活動を続けています。



救世軍公報　ときのこえ
発行日　福音版／毎月１日、広報版／奇数月15日（除く７月）
定　価　福音版/1部40円、広報版/1部100円
（税込）　クリスマス特集号（12月1日号）/1部100円
振　替　00180－5－4400
発行兼　救　世　軍
印刷人　代表者　スティーブン・モーリス
編集人　山谷　真
発行所　救世軍本営　https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話　03-3237-0881（代表）
Mail　jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所　ピーアンドエス
@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会　救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
□ 私の近くの救世軍を紹介してください。　□ キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。　□ 相談を希望します。